



## 認知症とは？

ご家族からおき忘れやしまい忘れ，知人や物の名前が出てこないなどの物忘れ症状があるので認知症ではないか，と尋ねられることがあります．認知症とはどのような状態を指すのでしょうか．

認知症は，以下の3つの条件を満たす場合に診断されます（図1）．



### 認知症の判断基準

#### ① 一度獲得された知的機能がなんらかの原因によって低下する

私たちは，学校や社会，家庭などでいろいろな知識や技能などを身につけてきます．なんらかの原因によって一度獲得された知識や技能が低下をしてくることが認知症の第一条件です．

#### ② 知的機能の低下によって社会生活や家庭生活，職業上で支障をきたす

たとえば，銀行員がお金の計算ができなくなってきた，主婦が買い物で何回も同じ物を買ってくるなどのように低下した知的機能によって日常生活に支障をきたしてくることが第二の条件です．物忘れがどんなに目立っても日常生活で支障がみられない場合には認知症とはいいません．ところが，日常生活のなかでどこまで支障をきたしてきたら認知症と判断するのかに関して，明確な基準はないのです．ここが認知症の判断を曖昧にしている点でもあります．たとえば，買い物で同じものを2回買ってきたら認知症なのか，2回ならば人によっては起こり得ることから正常範囲なのか，その基準ははっきりしていないのです．

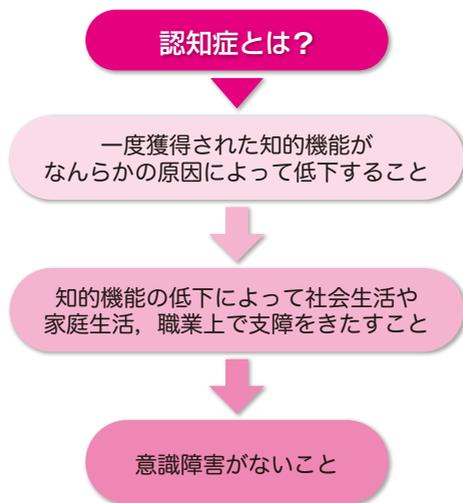


図1 認知症の定義

### ③ 意識障害がない

認知症の有無を判断する際、意識が清明であることが求められます。意識がはっきりしていない場合や特殊な意識障害—せん妄—がみられるときには、認知症の診断をしてはいけません。

認知症は、以前「痴呆」とよばれていました。「痴呆」には侮蔑的な意味合いがみられるなどの理由から、現在は認知症とよばれるようになってきました。「痴呆」という言葉は使用しないようにしたいものです。



### 年齢に伴う心配いらない物忘れ

歳をとると、誰でも人名や物の名前が出てこないことを経験します。物忘れイコール認知症ではありません。物忘れを自覚する方々の大部分は、年齢に伴う心配いらない物忘れ（加齢に伴う物忘れ）なのです。表1に年齢に伴う心配いらない物忘れと認知症でみられる物忘れの違いを示しました。

表 1 ● 年齢に伴う心配いらない物忘れと認知症でみられる物忘れの違い

	認知症	年齢に伴う心配いらない物忘れ
物忘れの内容	自分の経験した出来事を忘れる	一般的な知識や常識を忘れることが多い
物忘れの範囲	体験したこと全体を忘れる 最近の出来事を思い出せない	体験の一部を思い出せない 覚えていたことを思い出せない(ど忘れ)
ヒントを与えると	ヒントでも思い出せない	ヒントで思い出せることが多い
記憶障害の進行	緩徐に進行していく	何年経ても進行・悪化していかない
日常生活	支障あり	支障なし
物忘れの自覚	自覚していない(病識なし) 深刻に考えていない	自覚しており、必要以上に心配する
判断力	低下していくことが多い	低下はみられない
学習能力	新しいことを覚えられない 覚えようとしていない	学習する能力は維持されている
日時の認識	混乱していることが多い	保たれていることが多い
感情・意欲	怒りっぽい 意欲に乏しい	保たれている

川畑信也. 物忘れ外来ハンドブックーアルツハイマー病の診断・治療・介護ー. 中外医学社, 2006, 表8を加筆.

①最も大きな違いは、物忘れ（記憶障害）が進行するか否かです。年齢に伴う心配いらない物忘れでは、人名が出てこない、物の名前が出てこないなどのうっかり症状が主なもので、これらは何年経ても進行・悪化していきません。認知症、とくにアルツハイマー型認知症では、物忘れが緩徐に進行することが原則です。3年前よりも1年前、1年前よりも現在のほうが物忘れの程度や質、状態が必ず悪化してくるのです。

- ②年齢に伴う心配いらない物忘れでは、物忘れが原因となる日常生活での支障はみられません。たとえば、テレビに出てくる俳優の名前が思い出せなくても日常生活で困ることはないはずです。認知症に伴う物忘れでは、買い物に出かけたことを忘れて数時間後に再び買い物に出かけ同じ物を買ってくる、同じ人に何回もお歳暮を贈るなどのように日常生活で大きな支障がみられます。
- ③年齢に伴う心配いらない物忘れでは、場所に対する認識は保持されますが、認知症では場所に対する認識にしばしば混乱がみられます。
- ④認知症では、徘徊や暴力行為などの行動障害や幻覚・妄想などの精神症状がみられることがあります。年齢に伴う心配いらない物忘れではこれらが見られることはありません。
- ⑤年齢に伴う心配いらない物忘れでは、自分の物忘れに対して過剰に心配する、気にかけることが多いのです。認知症では、自分の物忘れに対する認識（病識）がないあるいは乏しい、深刻感がみられない、関心を示さないなどの態度がみられます。



### どこから認知症と考えるのか？

初期の認知症と年齢に伴う心配いらない物忘れを厳密に区別することは、意外にむずかしいことが多いのです。両者を区別する最大のポイントは、社会生活や家庭生活で支障がみられるか否かです。しかし、ごく軽度の認知症の段階では、目立った支障がみられないことも多いのです。同居しているご家族が以前と比べてなんとなくおかしい、物忘れが目立ってきた、以前はこのような人ではなかったなどの印象を受けるときには、認知症に進展している可能性が高いと思います。介護・看護スタッフは、ご家族から認知症ではないかと相談を受けた際には、認知症専門医療機関などを受診するようアドバイスすることを忘れないようにしてください。

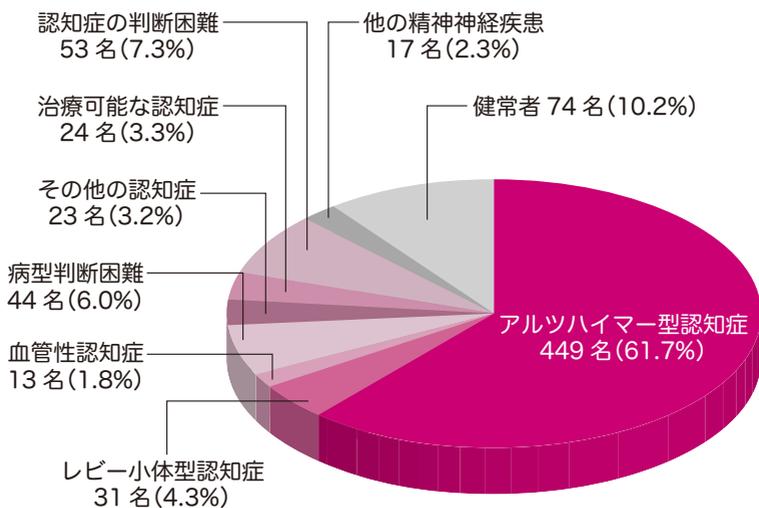


## 認知症を生じる主な原因疾患



### 知っておきたい認知症疾患は4つ

認知症を生じる疾患は、医学的には70から100前後あるといわれています。しかし、日常の認知症現場で介護・看護する機会が多い認知症疾患は、アルツハイマー型認知症と血管性認知症、レビー小体型認知症、前頭側頭型認知症の4疾患と思います。そのなかでアルツハイマー型認知症が大半を占めていると考えられます。図2は、著者が開設している物忘れ外来を2年間に受診した患者さん728名の診断の内訳を示したものです。アルツハイ



八千代病院 2008年8月～2010年12月

図2 物忘れ外来受診728名の診断内訳